

深い学びを実現する「読むこと」の学習活動の工夫 —文学的文章を読むことの授業づくりを通して—

（実践者）兵頭 宣彦

1 研究テーマ設定の理由

国語科において「持続可能な社会の創り手」を育むために、どのようなことができるだろうか。それは、言葉による深い学びを実現することにあると考える。言葉を用いて、自分や相手、対象、そして言葉そのものをより深く捉える学習。言葉を用いて、既存の知識を結び付けたり、新たな価値を生み出したりする学習。一つの見方・考え方だけにとらわれるのではなく、言葉を用いて、他者から複数の見方・考え方を学び、状況や場面に応じて、ふさわしいものを選択していく学習。そのような学習が深い学びにつながっていく。

「読むこと」を取り上げることにしたのは、以下のような理由がある。

本校の生徒は、授業で意見や感想を堂々と述べることができる。しかし、その根拠を追求していくと、文章を読み取る段階での思い込みや読み違いをしている生徒が一定数いることが見えてくる。国語科では、「確かで豊かな言葉の力」を育成することを目指している。生徒が自分の読みを堂々と述べることができるのは、「豊かな読み」であるとは言えるのかもしれない。しかし、文章を正しく読み取り、そこに根拠を求める「確かさ」がなければ、本当の意味で読む力が付いたとは言えないであろう。したがって、今年度の研究を通して、教室で一つの文学的文章を読むことの良さを味わいながら、生徒一人一人にとって、「確かで豊かな読む力」を高めることができる学習を展開したい。また、「読むこと」の学習の中で「確かさ」と「豊かさ」の両方を求めていくことが、自ずと深い学びにもつながっていくと考える。

2 研究の内容及び方法

(1) 研究内容

文学的文章を「読むこと」の単元において、①「自由に解釈させ、内容の面白さに浸る場面」②「表現に着目し、分析する場面」③「自分自身の生活や経験と結び付けて味わう場面」を設ける。その学習過程を通して、文学的文章の魅力や解釈の根拠を本文に求める〈分析的な読みと、それを基に作品の良さを改めて味わう〈解釈〉的な読みを身に付けさせることで、深い学びの実現を目指す。

(2) 研究方法

ア 指導の計画

先行研究を基に、現代における「読むこと」を捉え、単元構想の方向性について考える。

イ 指導の実際

〈解釈〉と〈分析〉を取り入れた「読むこと」の単元を実践する。

ウ 生徒の学びの実際

〈解釈〉と〈分析〉を取り入れた「読むこと」の授業による生徒の学びを明らかにする。

エ 考察

生徒の学びをまとめ、考察する。

3 研究の実際

(1) 指導の計画

「読むこと」の指導は、1900年の「第三次小学校令」において国語科が成立して以来、120年にわたって行われてきた。しかし、その中で「読むこと」の捉え方は、大きく揺れ動いてきた経緯がある。

- 文学作品には確固たる正解があり、読み手はその確固たる正解に向かって、読み進めていくという解釈学的な「読むこと」。
- 「テキスト」(文学作品)は、一度書かれて作者の手を離れると、自律的なものとなり、多様な読み方が許されるという「テキスト論」での「読むこと」。
- 主体である「読み手」(＝第一項)、客体である「本文」(＝第二項)、客体そのものとして「原文」(＝第三項)が存在するという「第三項理論」での「読むこと」。
- 読者の生活経験を基に、テキストを対話的に理解するという〈解釈〉としての「読むこと」。
- 理論的・科学的な知識を基に、テキストを技術的に理解するという〈分析〉としての「読むこと」。

この流れを受け、「読むこと」には〈解釈〉的な読み方と〈分析〉的な読み方があり、使いこなせるようになるべきだと主張したのが鶴田清司である。鶴田は、〈解釈〉と〈分析〉には「相補性」「媒介性」「包含性」という三つの原則があると指摘し、授業で指導する際には〈解釈〉→〈分析〉→〈解釈〉というプロセスを経るべきだと指導法にも言及している。

PISA 調査の結果、日本の高校生は、テキストに書かれていることを自らの知識や考え、経験と結び付けて解釈し、熟考・評価し、表現する力が弱いことが判明した。先述の鶴田は、この課題を解決するためにも〈解釈〉と〈分析〉が大切なのだと主張した。〈解釈〉とは、書かれていることを生活経験レベルの知識と結び付けて読むことであり、〈分析〉とは、理論的・科学的レベルの知識に結び付けて読むことだからである。〈解釈〉的な読み方と〈分析〉的な読み方を身に付けることにより、PISA 型の「読むこと」の力も高めることができるというのである。

したがって、本研究では、鶴田の〈解釈〉→〈分析〉→〈解釈〉というプロセスを参考にして文学的文章を「読むこと」の単元において①「文学的文章を自由に解釈させ、内容の面白さに浸る場面」②「文学的文章の表現に着目し、分析する場面」③「文学的文章を自分自身の生活や経験と結び付けて味わう場面」を設けることで、「読むこと」の資質・能力を高めることができる深い学びを実現したいと考えた。

(2) 指導の実際

ア 単元名

文学的文章の魅力について考えよう (第2学年 C読むこと)

イ 単元目標

- 登場人物の心情が表れた語句や描写、語り手の語り方に注意して読み、その表現を手掛かりに文学的文章を読み深めることができる。 [知識及び技能] (1)エ
- 文章の構成や表現の効果といった観点を明確にして、文学的文章を分析的に読むことができる。 [思考力、判断力、表現力等] C読むこと(1)エ
- 言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を生活に役立て、我が国の言語文化を大切に、思いや考えを伝えようとする。 「学びに向かう力、人間性等」

ウ 重点目標

<本質的な問い>

文学的文章を読み味わうためにはどうすれば良いか。

<永続的な理解>

文学的文章は、作者によって登場人物や場面、語り手などが設定され、創作された文章である。しかし、一度作者の手を離れた文学的文章は、読み手のものとなる。文学を読むという行為は、言葉・表現や、そこに立ち現れる人間の姿を、読み手が自分の生活体験や読書経験と結び付けて意味を見いだすものである。

本来個人的な営みであるはずの「読むこと」を教室で行うことで、読みは変容し、深化していく。友達の読みや教師の働きかけをきっかけに、新たな視点を得ることができたり、より深く文学的文章を捉えることができるようになったりする。その中で、登場人物や場面、語り手の設定の仕方、登場人物の言動の意味、語り口や描写の効果など、読み深める手立てを得ることが大切であると理解する。

エ 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
登場人物の心情が表れた語句や描写、語り手の語り方に注意して読み、その表現を手掛かりに文学的文章を読み深めることができる。 (1)エ	文章の構成や表現の効果といった観点を明確にして、文学的文章を分析的に読むことができる。 (C(1)エ)	学習課題に沿って、文学的文章の魅力や、その魅力を支える表現・構成の良さを味わい、自分の考えを伝えようとしている。

オ 評価方法

パフォーマンス課題	その他の評価方法
「盆土産」で学んだことをどのように日頃の読書につなげていきますか。中学1年生に「読書のすすめ」を書きましょう。	○課題を追究する様子の観察 ○ワークシートへの記述

カ パフォーマンス課題のルーブリック

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
A	「盆土産」で身に付けた語句や表現を生かし、読み手（中学1年生）のことを意識して「読書のすすめ」を書くことができる。	「盆土産」を読んで理解したことや考えたことを自分の知識・経験と結び付け、「読書のすすめ」を書くことができる。	「盆土産」の魅力や、その魅力を支える表現・構成の良さを読み取った経験を振り返り、日頃の読書への生かし方を伝えようとしている。
B	「盆土産」で身に付けた語句や表現を生かし、「読書のすすめ」を書くことができる。	「読書のすすめ」を「主張」「根拠となる事実」「理由づけ」の三角ロジックを使いながら、書くことができる。	「盆土産」の学習を振り返り、日頃の読書への生かし方を伝えようとしている。
C	「読書のすすめ」を書く際、「盆土産」で身に付けた語句や表現を生かせていない。	「読書のすすめ」を書く際、「主張」「根拠となる事実」「理由づけ」の三角ロジックを使えていない。	「盆土産」の学習と日頃の読書への生かし方がつながっていない。

キ 指導計画（全7時間）

時間	ねらい・学習活動	重点	記録	評価規準（評価方法）
1	学習の見通しを持つ ・パフォーマンス課題を知り、単元の見通しを持つ。 ・「盆土産」と出会い、初読後の感想や疑問をまとめる。	思 態		・「盆土産」を読み、登場人物の言動や情景描写について、興味を持ったことや疑問に感じたことを書くことができる。（「学びの足跡」） ・単元の学習を通して、どのような資質・能力を高めるのか理解することができる。（「学びの足跡」）
①「文学的文章を自由に解釈させ、内容の面白さに没入する場面」				
2 3 4 5 本時	「盆土産」を読み深める ・八つの〈分析の視点〉から文章を読み直す。（各班一つを担当する） ・〈分析の視点〉から読み深めた内容を発表する。（全体） ・「盆土産」の表現について話し合う。（全体） ・最終感想をまとめる。	知 思 態		・「盆土産」の登場人物や場面、語り手の設定の仕方、登場人物の言動の意味、語り口や描写の効果について分析することができる。（観察、分析シート） ・〈分析の視点〉を基に読み深めた内容を分かりやすく発表することができる。（観察） ・他の班の発表を参考にしながら、「盆土産」を読み直し、最終感想をまとめる。（「学びの足跡」）
②「文学的文章の表現に着目し、分析する場面」				
6 7	パフォーマンス課題 ・「盆土産」で学んだことを生かしながら、中学1年生に「読書のすすめ」を書く。 ・互いの「読書のすすめ」を評価し合う。	思 態	○ ○	・「盆土産」の魅力を踏まえ、読み手（中学1年生）のことを意識して書くことができる。（パフォーマンス課題） ・「盆土産」を読んで理解したことを自分の知識・経験と結び付け、「読書のすすめ」を書くことができる。（パフォーマンス課題） ・「盆土産」の魅力や、その魅力を支える表現・構成の良さを読み取った経験を振り返り、日頃の読書への生かし方を伝えようとしている。（「学びの足跡」）
③「文学的文章を自分自身の生活や経験と結び付けて味わう場面」				

(3) 生徒の学びの実際

ア 「文学的文章を自由に解釈させ、内容の面白さに浸る場面」

初読後の感想の中で、生徒は「盆土産」と初めて出会い、その面白さや魅力を味わった。生徒がこれから読み深めていきたいと感じたポイントを分類すると以下ようになった。(複数書いている生徒もいる。)

- ・ 何度も出てくる「えびフライ」「えんぴフライ」について考えたい。(9名)
- ・ 題名の意味について考えたい。(8名)
- ・ 主人公の気持ちの変化について考えたい。(7名)
- ・ 方言の意味や効果について考えたい。(7名)
- ・ 全体の構成や人物設定について考えたい。(3名)
- ・ 表現の工夫について考えたい。(2名)
- ・ 父親の家族への気持ちを考えたい。(2名)
- ・ 祖母の言動について考えたい。(2名)

イ 「文学的文章の表現に着目し、分析する場面」

前出の鶴田は、文学的文章で教えるべき「読みの技術」として五つ挙げている。

- ・ 構成を捉える技術 → 題名の意味・設定・全体構成を明らかにする。
- ・ 表現を捉える技術 → 描写や表記、表現技法の効果を明らかにする。
- ・ 視点を捉える技術 → 作者と語り手、一人称と三人称等の効果を明らかにする。
- ・ 人物を捉える技術 → 人物の描写から人物の心情や変化を明らかにする。
- ・ 文体を捉える技術 → 語り口や語尾、敬体と常体等の効果を明らかにする。

第1時に、生徒から出てきた課題意識(感想や疑問)を「読みの技術」と関連付け、「読み直しの視点」として提示した。

- 視点1 全体構成を読み解く(構成を捉える技術)
- 視点2 五感を用いた表現を読み解く(表現を捉える技術)
- 視点3 表現技法を読み解く(表現を捉える技術)
- 視点4 語り手を読み解く(視点を捉える技術)
- 視点5 主人公を読み解く(人物を捉える技術)
- 視点6 父を読み解く(人物を捉える技術)
- 視点7 祖母を読み解く(人物を捉える技術)
- 視点8 方言の効果を読み解く(文体を捉える技術)



ここから各班が選択し、担当した視点から読み直した。初読では見えなかった細かな表現に着目し、その効果について考えることができていた。

視点1の班は、冒頭、山場、結末の三つの場面に分けた。冒頭は、まだ見ぬ「えびフライ」への興味が膨らむ場面。山場は、「えびフライ」を味わう場面。結末は、「えびフライ」が「えんぴフライ」へと変化し、特別な存在になった場面。「えびフライ」や「えんぴフライ」の表現に着目して分析した。

視点2の班は、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚に関する表現を文章中から九個指摘し、それらが「えびフライ」を初めて見る場面、「えびフライ」を初めて食べる場面に集中していることを分析した。

視点3の班は、比喻や擬人法が使われていることを指摘した。また、これらの表現技法も、視点2の班と同じように、「えびフライ」を初めて見る場面と「えびフライ」を初めて食べる場面に集中していると分析した。

視点4の班は、語り手は大人になった少年だと分析した。その理由として、標準語で語っていることや、当時「とっちゃ」だったのが、地の文では「父親」と語っていることを挙げた。

視点5の班は、主人公が何度も「えびフライ」とつぶやいていることからやドライアイスに手を出すところから、好奇心旺盛な人柄を読み取った。また、川に釣りに行ったり、父親を見送りに行ったりするところから、幼いながらも家族に貢献しようとする人柄も読み取った。

視点6の班は、眠りを寸断しながら「えびフライ」を九時間も冷やし続けたところから、父の優しさを読み取った。一方、墓参りの時に少し離れたところではたばこをふかす場面や、最後の別れで何か言いたげなまま乗車する場面から、父親の不器用さにも触れた。さらに、

母や祖父も含めた家族を大切にしているところから、「えびフライ」を6尾買ってきたのは、生きている自分たちのためだけでなく、亡くなった母や祖父も含めた家族みんなのためではないかと指摘した。

視点7の班は、口数が少なく「えびフライ」を食べたことがないことを内緒にしていたことから、祖母は少し意地っ張りな性格だと指摘した。ただし、墓参りの場面で「えんぴフライ」とつぶやいたことが、最後の別れの場面での主人公の「えんぴフライ」に影響を与えた可能性を考えると、作品中で重要な役割をしていると分析した。

視点8の班は、文章に出てきている方言について調べ、東北の方言であることを指摘した。また、語りは標準語、登場人物は方言という使い分けから、方言の温もりを際立たせる効果や語り手が成長した主人公だと分からせる効果があると発表した。

各班の発表を終えた後、多くの生徒が初読後に課題意識を持っていた二つの表現（「えびフライ」と「えんぴフライ」／「盆土産」という題名）をテーマに全員で話し合った。これまで各班で行った分析とつなげながら、しっかり考えることができていた。

ウ 「文学的文章を自分自身の生活や経験と結び付けて味わう場面」

生徒たちは、初読後の感想からの読みの変化や印象に残った友達の読み、自分の生活経験とつなげた解釈を綴った。読みの変化については、考察で詳述する。

(4) 考察

本研究の有効性について、二つの視点から考察したい。

一つ目は、①「自由に解釈させ、内容の面白さに浸る場面」②「表現に着目し、分析する場面」③「自分自身の生活や経験と結び付けて味わう場面」の各場面における生徒の読みの変化から考察する。読みの変化を具体的に捉えるため、ここでは生徒Aと生徒Bを取り上げることにする。

	生徒A	生徒B
①「自由に解釈させ、内容の面白さに浸る場面」	「盆土産」を初めて読みました。方言がとても印象的でした。私が気になったのは、父親はなぜ「えびフライ」を6尾買って帰ったのかということです。みんなと考えてみたいです。	僕は、最後の場面で気になる表現がありました。それは、「なぜだか不意にしゃくり上げそうになって」や「いつもより少し手荒くて、それで頭が混乱した」です。主人公も父親も、お互いが寂しさを感じつつ、お互いを困らせないようにしているのだと思いました。
②「表現に着目し、分析する場面」	視点6の班の発表を聞いて、私が最初に疑問に感じていたことが解決しました。それは、6尾の「えびフライ」は、亡くなった母や祖父の分も含まれているのではという指摘でした。お盆という状況や墓参りに時の様子などを考えると、説得力のある分析だと感じました。	僕たちの班は、視点4で「語り手」について考えました。初めは亡くなった母や祖父が語っているのかと思いましたが、Cさんが「父親」「姉」「祖母」という語り方から「主人公」ではないかと気付きました。また、標準語であることから、大人になった主人公だと判断しました。
③「自分自身の生活や経験と結び付けて味わう場面」	「盆土産」を読み味わうためには、細かい表現の工夫を見つけながら読むことが必要だと思いました。「えびフライ」の数に注目したり、「えびフライ」「えんぴフライ」という表現に注目したりすることで、家族愛を強く感じる作品になっていきました。 また、この単元で私は、友達の読みを参考にする大切さも実感しました。自分一人では気付かなかった視点から考えてみることで、「盆土産」をより深く味わえたからです。	「盆土産」の学習の中で、「語り手」に注目して読み深めていくことの大切さに気付きました。 僕たちの班は、文章中の言葉をもとに大人になった主人公だと読み取りました。そう考えると、最初に書いていた「なぜだか不意にしゃくりあげそうになって」や「いつもより少し手荒くて少し混乱した」の印象も、最初とは少し変わりました。 大人になった主人公は、小学4年生の時には気付かなかった「父親の不器用な愛情」を感じながら、懐かしくこの時の様子を語っているように感じられ、「盆土産」の新たな魅力を感じました。

生徒A・Bの変容について3点指摘する。一つ目は、____線部が示すように、単元の最初に生徒が課題に感じていたことが、その後の学習を通して、より深く捉えられるようになっていくということである。二つ目は、____線部が示すように、〈解釈〉→〈分析〉→〈解釈〉のうちの〈分析〉が、読み深める上で有効だと生徒が感じているということである。三つ目は、.....線部が示すように、同じ班の友達や別の班の友達の分析が、新たな気づきのきっかけになっているということである。

二つ目は、単元後のアンケート結果から考察する。文学的文章を読み深める上で、①「自由に解釈させ、内容の面白さに浸る場面」②「表現に着目し、分析する場面」③「自分自身の生活や経験と結び付けて味わう場面」というプロセスが有効だと感じた生徒は89%であった。その理由を以下のように述べている。

- ・視点1～8を設定して各班で読み取ったことを全体で共有したとき、「盆土産」の面白さに改めて気付くことができたから。
- ・単元を通して、細かい表現や一つ一つの言葉に着目して読むことが大切だと理解することができたから。また、場面構成や題名にも工夫があり、最初は見えてなかった「盆土産」の魅力を感じ取ることができたから。
- ・初めは難しい文章で読むのが嫌だったけど、「盆土産」で表現や構成の工夫を読み取る中で、作品をさらに理解することができたから。「ここがこうだから、こうなっている」ということが分かると、読むのが楽しかった。

このように、文章に根拠を求めて分析しながら読むことが、読み深めるために役立つのだと生徒たちが感じていることが、確認できた。

4 成果と課題

○考察の____線部や____線部、単元後のアンケート結果が示すように、文学的文章を「読むこと」の単元において①「自由に解釈させ、内容の面白さに浸る場面」②「表現に着目し、分析する場面」③「自分自身の生活や経験と結び付けて味わう場面」を設けることは、読み深めるために有効であることが分かった。

○考察の.....線部が示すように、教室で協働的に学びを進めることが、生徒の読みを広げたり深めたりする上で有効であることが分かった。

●鶴田は、〈解釈〉と〈分析〉には「相補性」「媒介性」「包含性」という三つの原則を指摘している。しかし、本実践では〈解釈〉と〈分析〉の関係性を明確に説明できていない。今後の実践で検証したい。

●生徒たちにとって「読む技術」が身に付いた単元になったと思う。しかし、「読む技術」を教えることが一人歩きしないようにしたい。教師としては、どの作品からどんな「読む技術」が学べるかを理解し、生徒たちが系統的に学べるよう配慮すべきだと考える。こちらも、実践を積み重ねて検証していきたい。



参考文献

- ・鶴田清司（1999）「文学教材の読解主義を超える」明治図書
- ・鶴田清司（2007）「〈解釈〉と〈分析〉に基づく文学教育論の構築」早稲田大学博士論文